

編著者による応答

大庭 弘継

まずは、本書を熟読し、問題点を指摘していたいただいた評者のお二人に感謝します。

指摘いただいた本書の問題点について、書評の行間に垣間見える疑問も含め、おそらく本書の執筆意図と編集方針をお話しすることが適切な応答になるかと思えます。

1 デュアルユース問題を議論する前提

本書の企画に先立つ科研費の応募段階から、軍事研究とデュアルユース問題を扱うこの研究には、大きな障害が明白でした。第一に、軍事研究というタームそのものが、イデオロギー色の強いものとして流通しており、学術としての「軍事研究」の研究を阻害しておりました。第二に、上記に関連して、軍事研究・デュアルユース問題に対する忌避感が強く、幅広い研究者の協力を得られにくい状況でした。第三に、デュアルユース問題の扱う領域が幅広く、十人を超える共同研究であっても関連領域を網羅するには困難を極めました。第四に、これが最も大きな問題ですが、学術的な軍事研究問題とデュアルユース問題の研究には蓄積がありませんでした。偶然にも、研究開始と機を同じくして杉山滋郎『「軍事研究」の戦後史』が刊行され、また評者たちのような気鋭の研究者も現れましたが、それでも研究者の層は薄く、掘るべき先行研究がありません。もちろん、海外におけるデュアルユース問題の蓄積はありましたが、日本特有の事情がある以上、私たちは日本特有のデュアルユース研究を新たに始めざるを得ませんでした。

2 本書の企図と結果

そこで目指したのは炎上と延焼です。ともすれば「ダメだね」の一言で蓋をされる、軍事研究とデュアルユース問題に対して、様々な分野の研究者が当事者として対処せざるを得なくなるよう、あらゆる分野を炎上・延焼させることを目的としました。そのうえで、傍観を決め込んでいた研究者たちを、否応なく巻き込む、結果としてあらゆる分野におけるデュアルユース問題への考察が進

む、そのように企図しました。具体的には、以下のようなプロセスを考えました。

第一に、多くの研究者の関与を求める仕掛けとして、具体的技術を考察する執筆者には厚い記述(thick description)を求めました。具体的には、デュアルユース問題が顕在化している象徴的な領域(核・原子力、宇宙、バイオテクノロジー、サイバーセキュリティ、AI・ロボット)の各章ですが、その厚い記述は、(言葉の上では峻別できる)軍事研究問題も軍民デュアルユースも善悪デュアルユースも混淆して錯綜し、研究開発現場を当惑させている現状を明らかにして頂きました(なお、混淆し錯綜する現状を踏まえ、概念として峻別してしまう、軍民両用性と用途の両義性の両タームの使用を避けております)。

第二に、その混淆錯綜状態を踏まえたうえで、厚い記述に描かれた個別具体的な現実と往来できる哲学的考察を求めました。この錯綜の茂みに踏み入ったうえで、何とか混淆と錯綜を整理できるように編み出されたのが、序章と第12章で言及する類型論です。

また、哲学的考察の各章の執筆者には、デュアルユース問題に対して実際に苦悩している個々の研究者に届くよう、現場を理解したうえでの議論をお願いしました。切れ味の良い抽象的な言葉は同業者には好評であっても、現場に届かなければなまくら刀です。それゆえ、ハードルの高い作業を要求したことになります。8章と9章の議論に歯切れの悪さを感じたとしても、それは、この高いハードルに挑んだ挑戦的な論考のゆえです。

同様に、第10章の仮想事例についても、苦悩を伝える手段として編み出されたものです。この手法は、デュアルユース問題の一分野でもある安全保障貿易管理においても、研究者に問題の機微を理解いただくために使用されています⁽¹⁾。

ともあれ、炎上と延焼を目的とした本書は、広範なテーマを扱いつつも、体系的かつ網羅的にはなりません。わかりやすい内容でもありません。また、デュアルユース問題を克服する指南書でもありません。この手に余る問題をどのように体系的な全体像として提示し、社会で共有して議論する仕組みを整えるか、科学技術の市民参加

も含めて研究を拡大深化させることが次のステップになると考えております。

注

- (1) 産学連携学会2011『研究者のための安全保障貿易管理ガイドライン（改訂第2版）』「大学における安全保障貿易に係る輸出管理上のトラブル仮想事例集」（55-63頁）http://j-sip.org/info/pdf/anzenhoshoho1-1_2.pdf、2023年5月19日最終アクセス。